

2021 年度目標達成状況報告書（デザイン学部）

*自己評価は「S・A・B・C」の4段階で「S：十分満たしている、A：満たしている、B：概ね満たしている、C：満たしていない」

No.	評価基準		
1	年度目標	理工系総合大学にある特長を生かした[教育]の確立＝蓄積された、感性、スキル、各演習の授業効果をロジカルに検証した結果を共有する	
	年度末報告	学部の自己点検 WG による点検・評価	
		自己評価	B
		理由	緊急事態宣言（2020）＋まん延等防止措置(2021)による遠隔授業の期間が結果として長期に及んだものの、オンデマンド・ハイブリッド・ハイフレックス型授業それぞれの新たな授業ノウハウが蓄積された。その結果、今後新たな感染症拡大にあっても、フレキシブルに授業を運用することが十分に可能である。なお現在も一部で演習室定員の関係から入構者の制限を設けており、十分な検証まで至っていないことから評価は（B）とした。
改善策	対面授業と遠隔授業それぞれのメリットを生かし、特に感性演習やスキル演習など、初学者に複合的な理解を必要とする授業での効果を検証、さらに他に演習科目でも展開している。また授業アンケートなどと組み合わせ前期終了の時点でアウトカムの分析を目指す。		
No.	評価基準		
2	年度目標	学生との[距離感]を意識する…遠隔でもベストケアへ	
	年度末報告	学部の自己点検 WG による点検・評価	
		自己評価	A
		理由	Zoom などの会議ツールや、Moodle などの授業用プラットフォームの活用により、学部創設以来の最も高い就職率を達成することが出来た。一方で卒業年次生は指導時間のさらなる確保、教員とのコンタクトを希望しているため、今後一層その充実を目指していく。
改善策	アドバイザーグループ、研究指導における学生との距離感、関係性を構築するための丁寧で配慮を伴う指導について、教授総会にて教員各位へ伝達、特に学生個人と教員の特定のつながりや緊密な関係性については最大限の注意を払うようお願いした。また、フレキシブルに ICT 環境を活用するよう促す。		
No.	評価基準		
3	年度目標	デザイン関心層の受験生へ届けるカリキュラムポリシーと、高等学校の新科目「情報Ⅰ,Ⅱ」の導入への対応、準備	
	年度末報告	学部の自己点検 WG による点検・評価	

		自己評価	A
		理由	カリキュラムポリシーではシラバスの記述内容について学部教務委員会を中心に精査、科目毎の表記の差異、曖昧な記述、特に評価の基準としない出席率の表記に注意を払った。またホームページの更新頻度を上げ、分かりやすい表記を徹底した。
		改善策	シラバスの精査、授業用プラットフォーム Moodle の活用、「情報 I」科目の情報収集は 2022 年度も継続しており、現在は広報課を通じ実際に高等学校の情報科目担当教諭へのヒアリング実施を予定している。

No.	評価基準	
-----	------	--

4	年度目標	偏差値の目標再設定／視覚デザイン専攻 45.0、工業デザイン専攻 47.5	
	年度末報告	学部の自己点検 WG による点検・評価	
		自己評価	C
		理由	受験生世代の減少に伴い、比較的低い偏差値帯の受験生、合格者を受け容れざるを得ない状況が続く。特に年内入試の比率を下げた影響が年明けの一般入試にも及んだ。またデザイン分野の学修によって将来を押し量れない状況が拍車を掛けたとの分析をしている。現在の偏差値は視覚、工業両専攻ともに 42.5 である。
		改善策	年内入試の受験生、志願者増のため、デザイン学部では例年影響のある対面型オープンキャンパスの活性化と展示、模擬授業などコンテンツの拡充、さらに情報発信を緻密に行うことにより、デザイン関心層にも届く学部の魅力を丁寧に発信。特長あるカリキュラムと高い就職率を前面に押し出した広報活動を行う予定である。

【年度目標達成状況総括】

新型コロナウイルス感染症の出口も漸く見えてきた印象の 2022 年度、この数年間で蓄積した授業方法の展開はポジティブに捉えて次代のデザイン学部教育に活かせる見通しが立った。一方で 2020 年度入試では過去最高の数字を出しており、その当時まで積極的に実施していた広報活動、学修する内容の丁寧な説明と、デザイン分野の理解を促す対面式のオープンキャンパスでの説明や、普段の学生が学修する様子など、学外への学びの可視化と整理された発信が、翌年度の受験者数を左右する事実がより鮮明となった。

【2021 年度目標の達成状況に関する大学評価】（自己点検評価委員会）

年度目標 4 件に対し適切な自己点検・評価がなされ達成されている。改善の余地のある項目については引き続きその改善に向け検討してほしい。